

札幌市立平和小学校の取組【読書：図書館活用授業】

1 研究のねらい

読書活動は、子どもが、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことのできないものである。

子どもが読書活動に取り組むにおいて、大事な要素となる一つに、「読書環境の充実」が挙げられる。

◇手に取れるすぐ近くに、「読みたい本」や、「読むべき本」があること。

◇大人自らが本を読み、その姿を子どもに見せること。

など、学校や地域・家庭が協力し、読書ができる環境づくりを進めていくことが、子どもの読書活動に対する、意欲や関心を高めていくことにつながる。

本研究は、地域・家庭との連携による、本校での継続した取組を進めながら、地域図書館との連携も取り入れた、「読書環境の充実」について検証したものである。

2 取組内容

(1) 学校における子どもの読書活動の推進

① 言語活動を意識し、楽しさや必要感を生み出す

現行の国語科の教科書（光村図書）では、読書活動を広げることを意図した教材が、各学年で扱われている。

3年生では、説明文・物語文を問わず、教材文の理解を深めたり、自分の興味関心をもった事柄について調べ、知識を広げたりする学習と、読書活動が結び付けられ、一年を通して行われる。教科書にも、並行読書できる本が、多数紹介されるなど、常に本との関わりによる言語活動が位置付けられている。

単元『本を使って調べよう』では、図書館の役割や使い方について学習した。この学習により、子どもたちは、自ら主体的に学ぶ力の一つを身に付けていくことになる。図書館にある本を読んだり、調べたりする学習活動は、子どもたちの中に、読書活動の楽しさを育むとともに、必要感も生むことができた。

② 教師の意図が子どもの意識を育てる

上記のような学習活動が行われていく上で、学校図書館が果たす役割は大きい。また、全ての教職員と地域・家庭とが連携し、学校全体で子どもたちの学習活動・読書活動を推進していく体制を整備することが重要である。学習活動を進めていくにあたって、学校図書館の蔵書にない本については、札幌市図書館蔵書検索システムを活用して、地域図書館との連携を進めていくことができた。

校内では、言語活動の充実に向けた取組が進んでいる。読書活動と言語活動が結び付くことで、たくさんの書物が必要となり、昨年度より、寄託図書の活用回数が増えた。結果として、教師が読書活動を意図して言語活動に取り組んだことにより、子どもの読書への需要と意識が高まり、地域図書館との連携が進むことになった。

(2) 地域・家庭との連携による読書活動の推進

① 読書活動の広がりを図る

本校では毎年、読書週間の期間に合わせて『全校読み聞かせの会』を実施している。

◇各教室で、教師と保護者ボランティアがペアとなり、13会場で本の読み聞かせを行う。

◇子どもたちは事前に、会場ごとに読まれる本から、自分の興味や関心に合わせ、聞いてみたい本が読まれる会場を選び、それぞれに分かれて読み聞かせを聞く。

ボランティアには、地域の方や学校開放図書館司書のOBだけではなく、在校生の保護者も含まれている。活動への保護者の参加は、子どもたちが読書活動を行うにおいて、学校と家庭とのつながりを図る点で大きな意味をもつ。



② 地域や家庭とともに進めることで

『全校読み聞かせの会』に限らず、学校で行われる教育活動に、地域や保護者の方が携わっていくことの意味は大きい。今後、教育課程におけるカリキュラムマネジメントを進める中で、学校では、こういった取組が増えていくと予想される。本校の本活動による取組は、その大きな土壌となり得るものである。

学校と地域や家庭が連携して活動を進めていることは、子どもたちにとって、家庭・学校を問わず、どこでも読書活動を行っていかうとする意識を育てていくことにつながる。また、保護者にとっては、学校と連携して行うことのできる教育活動となり、本校の教育活動を理解していただく上でも意味のあるものとなる。

大事なことは、子どもたちが身に付けていく力が明確になっていることと、その過程を学校と地域や保護者の方が共有していることである。

3 成果と課題

(1) 成果

現行学習指導要領における『言語活動の充実』に向けた取組が、各教科の中で進んでいる。学習の中に言語活動として読書活動がしっかり位置付けられたことが、学校図書館と地域図書館の使用頻度が増える結果となり、連携を図ることにつながった。

子どもたちにとって、身近にいる大人が書物に親しんでいる様子を見ることが、読書活動への大きな入り口となる。読書活動がもたらす豊かさは、年齢を問わず享受されるものである。教師だけでなく、地域や保護者の方が関わること。また、子どもたちの読書活動を推進するという目的が共有されていることが成果につながる要因となった。

(2) 課題

今年度の取組から言えることは、『地域図書館の活用』そのものが目的化してしまっただけは、取組は単発となり、連携は進まないということである。子どもたちに、読書活動を通して、『豊かな心を育む』という広義なねらいがあり、その手だての一つとして、『地域図書館の活用』が挙げられる。ねらいをはっきりとさせ、それに関わる人間の中で共有化することによってこそ、意味のある活動へとつながる。